

## 神のささやき

ヨブ記 25-27 章

### はじめに

ー昨年から少しずつ旧約聖書の「ヨブ記」を学んでいます。今日は 25-27 章に書かれている内容から学びたいと思います。

### 1. ヨブの試練と信仰

ヨブは、誠実な心を持っていて、神様を愛し悪から遠ざかっている人でした。神様は、そんなヨブを祝福して、多くの財産と多くの子どもたちを与えられました。

しかしそんなヨブに、サタンが目を留めて、神様にこう言うのです。「ヨブは、あなたに祝福されて、多くの財産と多くの子どもたちに恵まれているから、あなたを愛しているに過ぎません。もし財産と子どもたちを失えば、きっとあなたへの信仰を捨てるに違いありません」。

そこで神様はサタンに、ヨブの財産と子どもたちを奪うことを許可しました。するとヨブは、犯罪や自然災害に巻き込まれて、一日のうちにすべての財産と子どもたちを失ってしまうのです。

しかしヨブは、そのような試練の中でも、決して神様への信仰を失いませんでした。彼は、神様を礼拝してこのように言います。「**私は裸で母の胎から出て来た。また裸でかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな**」(ヨブ記 1:21)。

するとサタンはもう一度、神様にこう言います。「ヨブは、財産と子どもたちを奪われても、健康に恵まれているから、あなたを愛しているのです。もし健康を失えば、きっとあなたへの信仰を捨てるに違いありません」。

そこで神様はサタンに、ヨブから健康を奪うことを許可します。するとヨブは、足の裏から頭のてっぺんまで、悪性の腫物で侵されるのです。夜眠れないほどの痛みがあり、やせ細っていきます。内臓も侵され、それが原因で体から悪臭が出るようになりました。その結果、人々からも避けられ、ゴミのように扱われます。そして妻からも、「**神を呪って死になさい**」(ヨブ記 2:9)と見捨てられます。

しかしヨブは、そのような試練が続く中でも、神様への信仰を失いませんでした。彼は、妻に向かってこのように言います。「**あなたは、どこかの愚かな女が言うようなことを言っている。私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわざ受けるべきではないか**」(ヨブ記 2:10)。

ヨブは、財産を失い、子どもたちを失い、健康も失い、妻からも見捨てられてもなお、神様への信仰を捨てなかったのです。

## 2. 三人の友人

ヨブには、三人の友人がいました。テマン人エリファズ、シュアハ人ビルダデ、ナアマ人ツォファルの三人です。彼らは、ヨブが災いの中で苦しんでいると聞いて、ヨブを慰めに駆けつけます。彼らは最初、ただヨブのために涙を流し、七日間（一週間）一言も語らずに、ヨブのそばに寄り添い続けたのです。

しかし三人の友人は、ヨブと会話を交わし始めると、次第に態度が変わっていきます。ヨブ記は全部で42章までありますが、その大部分は、ヨブと三人の友人との討論が書かれています。彼らは何を巡って討論していたのかと言うと、それはヨブの災いの原因は何かというものです。

三人の友人は、ヨブの災いの原因を「因果応報」の原理で解釈して、ヨブを教え導こうとします。「因果応報」とは、人は必ず自分の行いによって報いを受けるというものです。善いことをすれば祝福を受け、悪いことをすれば裁きを受けるというものです。

三人の友人は、ヨブの災いの原因は、ヨブの罪にあると考えます。ヨブが何か大きな罪を犯しているから、このような大きな災いに遭っているのだと言うのです。だからヨブがもし、自分の罪を認めて悔い改めるなら、災いは終わり、神様の祝福を取り戻せるはずだとヨブを教え導くのです。

## 3. うじ虫でしかない人間、虫けらでしかない人の子

これまで8-10章と18-19章に、シュアハ人ビルダデとヨブの討論が書かれていましたが、25-27章には三回目のビルダデとヨブの討論が書かれています。

25章でビルダデは、「神様の偉大さ」と「人間の罪深さ」を語っています。「神様の偉大さ」については、2-3節で「**主権と恐れは神のもの。神はその高い所で平和をつくれる。その軍勢の数には限りがあるだろうか。その光に照らされない者がいるだろうか**」と語っています。神様は高い所におられ、数えきれないほどの天体を造られた方であると言います。一方で、「人間の罪深さ」については、4-5節で「**人はどうして神の前に正しくあり得るだろうか。女から生まれた者が、どうして清くあり得るだろうか。ああ、神の目には、月さえ輝きがなく、星も清くない。まして、うじ虫でしかない人間、虫けらでしかない人の子はなおさらだ**」と語っています。ここでビルダデは、人間のことを「うじ虫」また「虫けら」と呼んでいます。

ビルダデにとっての神様は、高い所におられる方で、人間は「うじ虫」「虫けら」なのです。このようなビルダデの神理解、人間理解に対して、ヨブは26：2-3でこのように言います。「**あなたは無力な者をどのように助けたのか。力のない腕をどのように救ったのか。知恵のない者にどのように助言し、知性を豊かに示したのか**」。

ヨブは、ビルダデのような神理解、人間理解では、無力な者を助けたり、救ったりすることはできない、知恵のない者に助言することもできないと言うのです。人間を「うじ虫」「虫けら」のように見て、神様はただ高い所におられるだけ、それでは苦しみや悲し

みの中にある者に、何の励ましにも慰めにもならないと言うのです。

神様は確かに天におられ、高い所におられます。しかし神様は、天の高い所から御子イエスをこの地上に遣わされ、この地上に平和をつくられる方です。確かに人間は罪深い存在かもしれませんが。しかし神様は、人間を神様のかたちに造られ、尊い存在として造られました。詩篇 8：4-6 には、こうあります。「**人とは何ものなのでしょう。あなたが心に留められるとは。人の子とはいったい何ものなのでしょう。あなたが顧みてくださるとは。あなたは、人を御使いよりわずかに欠けがあるものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせてくださいました。あなたの御手のわざを人に治めさせ、万物を彼の足の下に置かれました。**」

神様は私たち人間を、神様のかたちに造られ、神様が造られた世界を神様に代わって治める存在として造られました。それは、私たち人間がどんなに罪深くて変わりません。神様は私たち人間のことを絶えず心に留め、顧みてくださるのです。

イエス様もこう言われました。「**二羽の雀は 1 アサリオンで売られているではありませんか。そんな雀の一羽でさえ、あなたがたの父の許しなしに地に落ちることはありません。あなたがたの髪の毛さえも、すべて数えられています。ですから恐れてはいけません。あなたがたは多くの雀よりも価値があるのです**」(マタイ 10:29-31)。イエス様ははっきりと、私たち人間は「雀よりも価値がある」と言われました。私たち人間は、髪の毛の数さえ数えられているほど、神様に心を留められ、顧みられている存在です。さらにイエス様を信じる者を神様の「子ども」として受け入れてくださり、ご自身を「父」と呼ばせてくださいます。

ビルダデのように、神様は高い所におられて、人間は「うじ虫」「虫けら」のような存在だと考えていても、苦しみや悲しみの中にある人に対しては無力です。確かに私たち人間は罪深い存在です。しかし神様は、私たち人間を神様のかたちに造られ、神様に代わってこの世界を治める存在として造られました。そして、御子イエス様の命さえ与えて、ご自身の「子ども」として受け入れてくださるのです。

ビルダデは、神様を「因果応報」の神様としてか見ていませんでした。しかしヨブは、神様を「恵み」の神様と見ていたのです。神様の偉大さと人間の罪深さを認めつつも、それでも人間を愛し心に留められる神様と見たのです。神様は、「因果応報」に縛られた神様ではありません。確かに神様は善に報い、悪を裁く方です。しかし同時に、罪深い者にもあわれみ深く、心に留め、顧みてくださる神様でもあるのです。特に、神様が選び、ご自身の子どもとして受け入れてくださった、イエス様を信じる者たちを、そのように扱ってくださるのです。

#### 4. 神についてささやきしか聞いてない

26 章でヨブは、「神様の偉大さ」について語ります。ビルダデは神様を、高い所におられ、数えきれないほどの天体を造られた方であると語りました。しかしヨブは、神様は高い所にだけおられるのではなく、「**死者の霊たち**」の所にも、「**よみ**」にも「**滅びの淵**」にもおられると語ります。さらに神様は、この地上にも、雲の中にも、水の中にもおられると語り

ます。神様はすべてを造られ、神様に隠されている所、神様に知られない所は一つもないと言うのです。ヨブは、ビルダデの神様理解よりも遥かに広く深い神理解を語るのです。

しかしヨブは26：14でこのように言います。「**見よ、これらは神のみわざの外側にすぎない。私たちは神についてささやきしか聞いていない。御力を示す雷を、だれが理解できるだろうか**」。ヨブは、ビルダデよりも遥かに神様を知っていました。しかしヨブも、神様のごく一部しか知らないと言うのです。ヨブは、神様の「ささやきしか聞いていない」のです。

ビルダデを含めた三人の友人たちは、「因果応報」の原理で神様の御業、この世に起こる現実をすべて説明できるかのように考えました。そしてその考えに従って、ヨブに悔い改めを迫り、責め立てました。しかしヨブは、私たち人間は「神についてささやきしか聞いていない」と言います。つまり、私たちは神様のすべてを理解することはできない、私たちは神様のごく一部しか知らないと言うのです。

神様は、私たちの頭や理解の中に収まる方ではありません。私たちは、神様の御業をすべて理解することはできません。この世に起こる現実の意味をすべて説明できるわけではありません。私たちには、「なぜ？」と思えることが沢山あるのです。私たちには、理解できないこと、分からないことが沢山あるのです。ですから私たちは、神様の御業のすべてを理解できるように、物事を決めつけたり、無理に説明しようとしなくて、神様は私たちの頭や理解を遥かに超えた方として、分からないままにしておくことが大切なのではないでしょうか。そして、神様は、イエス様を信じる私たちを確かに愛してくださっていること、神様のご計画には深い意味があることに信頼して、委ねることが大切なのではないでしょうか。決して私たちの頭の理解に神様の御業を無理に閉じ込めて、人を裁いたり、物事を決めつけたりしてはならないのです。私たちは、神様について「ささやきしか聞いていない」のですから。私たちにとって大切なことは、分からないこと、理解できないことを抱えたまま、神様を信頼することです。

## 5. どんなときにも神を呼び求める

27：2でヨブは、「**私は、私の権利を取り去った神にかけて誓う。私のたましいを苦しめた全能者にかけて**」と言います。ヨブは、自分のすべてを取り去った神様を、自分の魂を苦しめた神様を、なおも信頼しているのです。さらにヨブは、27：3-6で「**私の息が私のうちにあり、神の霊が私の鼻にあるかぎり、私の唇は決して不正を言わず、私の舌は決して欺くことを語らない。あなたがたを正しいとすることなど、私には絶対にできない。私は息絶えるまで、自分の誠実さをこの身から離さない。私は自分の義を堅く保って手放さない。私の良心は生涯私を責めはしない**」と言います。

ヨブは、自分は神様の前に誠実に歩んできたと言います。それを神様も確かにご存じだと言います。しかし、それなのに神様は、自分のすべてを取り去り、自分の魂を苦しめたと言います。ヨブの信仰がもし御利益信仰なら、ヨブは信仰を捨てていたでしょう。しかしヨブは、自分のすべてを取り去り、自分の魂を苦しめた神様をなお信頼し、自分はあな

たの前に誠実に歩んできたと言えたのです。

そして 27：10 では、「**彼は全能者を喜びとするだろうか。どんなときにも神を呼び求めるだろうか**」と言います。ヨブの信仰は、どんなときにも神様を喜びとし、どんなときにも神様を呼び求める信仰でした。順境の時も、逆境の時も、神様を喜びとし、神様を呼び求める信仰でした。ヨブは 13：15 でこのように言っていました。「**見よ。神が私を殺しても、私は神を待ち望み、なお私の道を神の御前に主張しよう**」。ヨブの信仰は、御利益信仰ではありませんでした。神様が自分を祝福してくれれば信じるけれど、祝福してくれないなら信じない、そういう信仰ではありませんでした。たとえ神様が自分のすべてを奪っても、魂を苦しめても、自分の命を奪っても、なおも神様を信じ、喜び、呼び求めるというものでした。もちろんヨブは、涼しい顔でそのような信仰を持っていたわけではありません。「神様なぜですか？」と問いながら、もがき苦しみながら、それでもなお神様の愛を信じ、神様の深い御計画に信頼したのです。

### **おわりに**

私たちは罪深く、偉大な神様に捨てられても何も言えない存在です。しかし神様は、私たちを永遠の昔から選び、イエス様への信仰へと導き、ご自身の子どもとして受け入れてくださいました。

神様は、私たちの理解を遥かに超えた方です。私たちには、神様の御業のすべて、この世の現実にかかるすべての意味を理解することはできません。

私たちはそれでも、神様の愛を見失わず、神様を信頼するかが問われているのです。分からないまま、理解できないまま、それでも神様を喜び、呼び求めていくかが問われているのです。

私たちは、すべてを知って神様を信じていくのではなく、神様のささやく声を聞いて信じていくのです。神様は、聖書の御言葉を通して絶えず、私たちにささやいておられます。このささやく声を握りしめ、たとえ嵐の中でも信仰をもって歩いていくのです。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは天地を造られた偉大な神様です。そして全世界と私たち一人一人の人生を、ご計画に従って導いておられます。私たちには、あなたのなさるすべてを理解することはできません。しかしあなたは、聖書を通して私たちにささやいておられます。私たちが確かに愛しておられること、私たちが確かに救ってくださることをささやいておられます。そのささやきを握りしめ、どんな苦難の中でも乗り越えていけるように、私たちの信仰を支えてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。